

## 八戸藩南部家墓所について（一）

藤田俊雄

### はじめに

八戸藩は陸奥国三戸郡（青森県）を中心に、九戸郡（岩手県）と志和郡（同県）を領有した外様大名である。寛文四年（一六六四）九月、盛岡藩二代藩主南部重直が後嗣を決めないまま死去したため、同年十二月幕府は遺領十万石の内、八万石を重直の弟の重信に与えて盛岡藩を相続させ、残り二万石を次弟の直房に分与する処置をとり、八戸藩が創設された。以後、明治まで八戸を治所として統治が行なわれた。

八戸藩では、藩主の菩提寺は臨済宗妙心寺派の月溪山南宗寺（八戸市長者一丁目所在）<sup>(1)</sup>であるが、領内では曹洞宗寺院が多く、浄土宗寺院がそれに次いでいた。また、八戸城下においては、他の城下町のように寺院を一ヶ所に集中して寺町を形成することがなく、城下の南にあたる長者山麓に集中させているのみである。この長者山の東麓に寛文十二年（一六七〇）に移転されたのが、月溪山南宗寺である。これより先、寛文六年（一六六六）に類家村の本寿寺の隣に建立され、寺領百石を給されていた南宗寺が、現在地に移されたのは長者山麓に寺院を集結

させる計画によるものと考えられる。開山は東厳と伝え、開基は初代藩主直房である。直房の父、南部利直の法名「南宗院殿月溪晴公大居士」よりその山号及び寺名がとられている。<sup>(2)</sup>寺地の東側に歴代藩主及びその一族の墓所が並び、「八戸南部家墓所」として県の史跡に指定されている。

一方、東京都港区芝公園三丁目に所在する勝林山金地禅林は、臨済宗南禅寺派に属し、同寺には江戸で死去した八戸藩二代直政・四代廣信・六代信依・七代信房・八代信眞の藩主をはじめとする一族の墓所がある。開山は金地院崇伝である。崇伝は徳川家康に認められ、僧録司に任命されている。僧録司とは、すべての禅宗寺院を総括する役目であり、金地禅林の僧録司は幕府が寺社奉行を設置するまで続いた。元和二年（一六一六）家族の死後、二代將軍秀忠は金地禅林を江戸城内の紅葉山から現在の場所に移している。<sup>(3)</sup>

ここでは、これまで調査報告されていなかった八戸藩南部家の領国および江戸での墓所を中心に紹介することによって、大名墓とその葬制の一端について考えてみたい。

つぎに各章の構成について述べる。

第一章では江戸時代の大名墓とその調査例について紹介する。第二章

では八戸藩南部家の領国での墓所（南宗寺）、第三章では同江戸での墓所（金地禅林）について、埋葬された人々の系譜を明らかにすると共に、八戸藩南部家の墓制について考察する。第四章では領国および江戸以外の八戸藩南部家の墓として、高野山奥之院に建立された墓と、高野山遍照光院と南部家の関係について考察する。

## 第一章 江戸時代大名墓とその調査例

江戸時代において、各藩ともに菩提寺があつたが、大別して領国の場合、領国と江戸の両方の場合に分けられる。東北地方に限ってみた場合、仙台藩の伊達氏、会津藩の松平氏、秋田藩の佐竹氏、米沢藩の上杉氏、盛岡藩の南部氏などの大名家では、藩主は領国で埋葬されることが多かったようである。一方、領国以外にも江戸に菩提寺をもつ大名家も多い。この背景には、参勤交代制の導入により、江戸藩邸と領国での生活を余儀なくされたことに自然発生的な要因が考えられよう。特に、江戸藩邸での生活を強いられた藩主正室等の場合は、江戸の菩提寺に埋葬される例が多かつたのではないかと推察される。

さて、江戸時代大名墓の調査には、地上に露出している墓石および墓壇等の調査と、地下埋葬施設の調査があげられよう。前者の調査例として、東北地方においては会津松平家御廟についてまとめた諸研究や、仙台市教育委員会による伊達家廟域としての経ヶ峰に関する調査報告<sup>(9)</sup>、弘前市立博物館による津軽家墓所移転後の再確認調査<sup>(10)</sup>などがある。後者の調査例としては、仙台藩初代藩主政宗の廟所・瑞鳳殿<sup>(11)</sup>、同二代藩主忠宗

の廟所・感仙殿並びに三代藩主綱宗の廟所・善応殿<sup>(12)</sup>の発掘調査があげられる。全国的にみても発掘調査の例はそう多くはなく、増上寺徳川將軍墓<sup>(13)</sup>、岡山藩主池田忠雄墓<sup>(14)</sup>、長岡藩主牧野家墓所<sup>(15)</sup>などである。

数少ないながらも、これ等大名墓の考古学の手法を用いた調査の結果、江戸時代大名家の墓制に関する多くの事実が明らかになった。わけでも、大名墓の構造の持つ規格性・保存良好な各種の副葬品の存在、家系および生没年代の明確な藩主等の遺骨の発見など特筆されるものといえる。

そこで本章ではまず、大名墓の構造の持つ規格性を論じる上で、その範となつたと考えられる徳川將軍家の靈廟についてふれた後、大名家の靈屋・墓について類例をあげた上でその規格性、將軍家靈廟との相違について明らかにしたい。

### (一) 徳川將軍家の靈廟

「靈廟」の語義、その歴史について簡単にふれる。「靈廟」は「靈屋」とも書き、「たまや」、「おたまや」、「やしろ」とも読む。元来、祖先の霊を祭る神聖な建物が起源であるという。遺体または遺骨を埋葬した上部に設けた建物、または遺体や遺骨を埋葬した墓所の前あるいはその近くに設けた礼拝施設である。なお遺体・遺骨でなく位牌を納めた建物も靈廟という。桃山時代に構築された高台寺靈屋（京都市）、阿弥陀が峯に造営された豊国廟（京都市、建物消失）が本格的靈廟建築の最初といわれる。靈廟建築には神式靈廟・仏式靈廟・儒式靈廟の別がある<sup>(16)</sup>。

徳川將軍家靈廟の先駆けとなつたのは、徳川家康の霊を祀るため造営された久能山東照宮（静岡市）・日光東照宮（日光市）である。続いて増

上寺（東京都港区芝公園）には二代將軍秀忠以下の靈廟等が造営され、寛永寺（東京都台東区上野）には三代家光（供養塔）以下の各靈廟、更に日光に家光の靈廟等が造営され、また一方、江戸城内には内廟として紅葉山及び本丸天守台下（後二の丸に移し、更に紅葉山東照宮に合祀、遂に撤去）に東照宮が造営されたのを始めとして、紅葉山には歴代將軍の靈廟が造営された。このように江戸時代の初期から中期にかけては、靈廟建築の全盛時代を現出していたのであるが、七代家継（有章院）靈廟が増上寺に営まれたのを最後に、八代吉宗（有徳院）以降は靈廟の造営が停止された。そして靈廟造営停止後は、靈牌は増上寺・寛永寺等における七代までの各靈廟に合祀し、唐門・拝殿・宝塔だけが建てられ、極めて質素なものとなった。また一方紅葉山に於ても、六代家宣（文昭院）靈廟を最後として、七代家継（有章院）以降はこの造営が停止され、六代までの靈屋内にそれぞれ合祀されるに至った。<sup>(18)</sup>

靈牌の合祀と共に、これまで廟について特定した名称がなく、「仏殿」ならびに「御堂」と称していたのを、正徳三年（一七一三）以後は「御靈屋」と称え、墓所を「御廟」と称していたのを「宝塔」と改めて称することになっている。また、墓所の上には今まで銅の多宝塔形の塔を設けてきたが、七代家継（有章院）より後は石の多宝塔に改められた。<sup>(19)</sup>

江戸時代の初期から中期へかけては、靈廟建築の全盛時代を呈し、各宝塔とも権現造りの靈屋（奥之院）を構え、その前面に廟社・廟堂としての靈牌所を同一地域内にそれぞれ分離して配置する形式を採用し、その規模の雄大、建築の壮麗を誇っていたのであるが、八代吉宗の治世下、徳川將軍の墓の形式に画期的な改正が行われたのである。第二次世界大

戦の戦火によって焼失する前までは、国宝として増上寺には、台徳院（二代秀忠）靈廟・崇源院（二代秀忠正室）靈牌所・文昭院（六代家宣）靈廟・有章院（七代家継）靈廟が、寛永寺には、嚴有院（四代家綱）靈廟・常憲院（五代綱吉）靈廟が現存していたのである。<sup>(20)</sup>

現在は旧台徳院靈廟のうち勅額門・丁子門・御成門が所沢市・狭山湖畔のユネスコ村に、惣門と有章院靈廟二天門が港区芝公園内に移築されている。一方、寛永寺の嚴有院・常憲院靈廟の勅額門・水盤舎・唐門・宝塔が造立の位置を変えずに現存している。<sup>(21)</sup>

靈廟建築および宝塔について紹介してきたが、次に増上寺將軍墓の調査結果から、埋葬施設・埋葬状態について述べる。増上寺に埋葬された將軍は二代秀忠・六代家宣・七代家継・九代家重・十二代家慶・十四代家茂の六人である。ここでは石室が堅固に作られ、美しく磨かれていたことなど、將軍墓のうちでは代表的な六代家宣の墓を中心に紹介する。

宝塔とその基段を取り除くと、下には長さ三・七メートル、幅二メートル、厚さ五十センチの巨大な石が二枚並べられ、さらにその下にはもう一層の巨石が敷かれていた。この石組の下は堅い漆喰の層で固められている。漆喰の層の下が墓の中心部である。

墓は、外郭の石組と内部の石室にわかれ、その間に木炭がつめてある。外郭は間智石（けんちいし）の石組で築かれていて、規模は三メートル程である。その内側に二・六メートル四方の石室が作られている。この石室はびつたりはめこまれた二枚の巨石で蓋がされており、石の合せ目には鉛の楔（くさび）・柄（ぼせ）をはめて離れるのを防いである。

石室の蓋石を開くと、内部には一面に石灰がつめてあった。石灰の下

には、銅製の棺が現われ、石室の内側と銅棺の間にも石灰がつめてあった。この銅棺は一辺の長さが一・五メートルの正方形で、縦・横に二条の銅の帯がかけられていた。銅棺の蓋の裏面には銘記があり、家宣の生歿月日、閏歴と諡を刻んでいる。銅棺の中には金襴きんらんの布が敷いてあり、その下は再び一面の木炭で、その下に木棺が納めてあった。木棺の下からも木炭が出土した。

木棺は縦横とも一・〇五メートル角の箱に造り、蓋をのせたものである。棺内には衣冠をつけて正装した遺体が納められていた。遺体の上に金襴の裂をひいて、その上に朱や石灰をのせて防腐の目的としている。副葬された品々には、飾太刀・衛府大刀の他、着用の小袖の内ふところには小さな袋物があり、その中には、小筆・矢立・墨壺・毛拔・耳搔・鏡などが収められていた。<sup>(22)</sup>

以上、六代將軍家宣墓の調査結果を概観してきた。他の將軍墓と共通するのは、將軍の場合は火葬されずに、遺体は防腐の処置がとられた上で埋葬されており、木棺はいわゆる「寢棺」ではなく「座棺」である。棺内に官位相当の衣冠束帯を着けて、足の裏を合わせて胡座あぐらをかいたような格好で座っているのである。また、石室の蓋石や銅棺の蓋裏には、林大学頭が撰定した墓誌銘が刻まれている。墓が、外郭の石組と、内部の石室との二重の石組で囲まれるようになるのは、家宣から以後になつてからであり、秀忠墓の場合は石室のみの石組である。墓穴の深さは最も標準的なケースと思われる三・八メートルぐらいのもの（家宣・家継墓）から六メートルにも及ぶもの（家茂墓）もある。棺も銅製・木製各一つの二重のもの（家宣墓）から銅製一つ、木製五つの六重のもの（家

重墓）まである。さらに、秀忠墓のように初期のものには、棺が早桶形式という極めて簡素なものもある。

## （二）大名家の霊屋・墓

現存する江戸時代の大名家の霊屋についてまとめたのが「表一」・「表二」である。この表の中には仙台藩の場合のように門閥、大身侍の廟や、江戸幕府開設前に没し、江戸時代になって廟を設けたものも含めた。藩名をあげればNo.1～6が弘前藩、7・8が盛岡藩、9～20が仙台藩、21～33が米沢藩、34～40が新庄藩、41～52が秋田藩、42が白河藩、43が中村藩、44～46が松代藩、47・48が尾張藩、49・50が福井藩、53～59が熊本藩関係の霊屋である。

藩主が没した後で、その霊屋を建立することが、近世初頭では各地で盛んに行われた。その先駆けとなったのが、豊臣秀吉を祀った豊国廟である。豊国大明神という神号のもとに、この天下人への追慕が高められた。次いで、徳川家康を祀った久能山・日光東照宮が造営され、秀忠の台徳院廟や家光の大猷院廟が相次いで造営された。こうした風潮の中で各藩でも霊屋が建立されることになる。

東北の雄藩・仙台藩では寛永十三年（一六三六）に初代藩主伊達政宗が没すると、経ヶ峰の地に本殿・拝殿・涅槃門・唐門・御供所・廻廊・玉垣からなる瑞鳳殿を造営した。本殿の下に石室を設けて遺骸を安置し、本殿中央の家形厨子には政宗の木像が納められ、仙台藩を築いた本尊として永く崇拝の対象となり続けたのである。この地には引き続いて、二代藩主忠宗廟の感仙殿、三代藩主綱宗廟の善応殿が造られ、仙台藩の先

考を祀る尊厳な霊地として崇められるに至るのである。<sup>(23)</sup>

この伊達家三代の廟所跡の調査は、徳川將軍家霊廟と大名家霊廟を比較する上で、多くの資料を提供している。建築史の立場からこの調査を担当された佐藤巧氏によれば、將軍家初期霊廟（久能山東照宮廟墓・日光東照宮廟墓・増上寺台徳院廟墓・日光大猷院廟墓）が、廟社・廟堂と廟墓とを同一地域内にそれぞれ分離して配する形式を採用し、その規模の雄大、建築の壮麗を誇ったのに対し、伊達家霊廟では、奥の院廟墓の制に近く、宝塔の前に僅かに拝殿を配する程度で、施設的に簡素であり、より仏堂的であるという。このような点からみても、寛永頃になると、戦国遺制に倣いつつも、すでにある基準が生じ、格式上からも將軍家を凌ぐ規模のものは大大名と言えども許されなくなるとの指摘がなされた。<sup>(24)</sup>

佐藤氏の指摘はまさに「表1」・「表2」にあげた他の大名家の霊屋建築についても当てはまる。尾張徳川家（47・48）の例を除けば、そのほとんどは墓所の上に建つ廟堂建築単独のもので、他に拝殿などの付属屋を持たないのが特徴である（ただし、米沢藩上杉家墓所のように、本来は廟堂の前に拝殿が建てられていたものが、明治になって取り除かれた場合もある）。また、廟は普通は一代一堂であるが、新庄藩戸沢家墓所（35・40）や、代々仙台藩伊達家の重臣であった茂庭家霊屋（20）のように数代の墓を覆って一堂が建てられているものもある。

さて、これまで見て来たように霊屋を設けこれを崇拜するのは別に、藩主が神式で埋葬された地に社殿が造営され、藩の守護的な信仰を受けていた例について述べる。

青森県岩木町百沢神馬野には古くから春日四神を祭る小社があった。

弘前藩四代藩主信政はこれを崇敬し、この小社の側を死後の廟所と定めた。宝永七年（一七一〇）に信政が没すると、五代信寿は遺命に従って信政をこの地に葬り、翌正徳元年（一七一）には社殿を造営し、信政の神号に因んで「高照霊社」と称した。社殿は会津藩の祖である保科正之を祀る土津神社（福島県猪苗代町）に範をとった準権現造である。なお、信政墓は八角塔の本墓（高岡霊社）号碑―正徳元年に建立の際には「高照霊社」であった号を、明治初年の神仏分離令により変更している）と四角柱の拝墓（弘前藩主越中守藤原信政墓）と刻まれている）の二基が隣接している珍しい形式のもので、現在、県指定史跡となっている。<sup>(25)</sup>

高照神社が弘前藩の守護的な信仰を受けていたことを示す資料の一つに、五十八枚の奉納絵馬がある。その調査報告によれば「…奉納者が藩主とその近親者、それに藩主を助けて藩政にあずかる重臣たちに限られていたことからすれば、高照神社の祭祀に参加できたのはこれらの為政者のみであったと考えられる。そこでもう一度前述の奉納理由をふり返してみると、天災の克服、藩主の還暦や世嗣誕生の祝い、藩の浮沈をかけた一戦への守護祈願など、津軽藩の家督の安泰と津軽宗家によるつがなない家督の継承に係わるものが目につく。したがって、高照神社の守護は藩を治める為政者を通じて、間接的に全藩士、領民におよぶような性格のものであったと考えられる。これらは、津軽藩政の基礎を築いた高照神君信政に対する信仰のあり方として相応しいものといえよう。」<sup>(26)</sup>とまとめている。

また、福井敏隆氏は最近の高照神社の調査から「江戸時代後期以降、

津輕藩において吉・凶事があると、その一つ一つが藩の重臣を使者にして同社に報告されている。御告書付と書かれたそれらの古文書を見ると、規模は違うが徳川將軍家における日光東照宮のような役割を、高照神社は持たされた事が想像されるのである。<sup>(27)</sup>と指摘している。

これまで大名家の霊屋建築について述べてきたが、会津藩の祖である保科正之を祀る土津神社や、弘前藩四代藩主津輕信政を祀る高照神社のあり方は、墓と神社建築が一体化したものとみられる点で、まさに日光東照宮のあり方と共通するものが感じられるのである。先に「霊廟」の語義、分類について簡単にふれたが、その中の「神式霊廟」に相当するとは言えないであろうか。なお、「表1」・「表2」に掲載した大名家霊屋は、そのほとんどが「仏式霊廟」であり、尾張徳川家の霊屋(47・48)は「儒式霊廟」に該当することを補足しておきたい。

最後に、大名墓の内部構造・埋葬状態についてふれ、この章のまとめとする。先に紹介したように、大名墓の調査例としては、仙台藩伊達家三代廟墓跡・岡山藩主池田忠雄墓所・長岡藩牧野家墓所など、数少ない。このうち、牧野家墓所の調査を担当された鈴木公雄氏の指摘は、大名墓の葬制を考える上で基本となる考え方と思われるので、その報告書から引用する。

「江戸時代大名の葬制は二つの側面からとらえることができる。一つは、將軍家を頂点とする武士階級の階級的・身分的秩序を明示する標示としての側面であり、いま一つは、そうした性格を持ちつつも、他の江戸時代の人々と共通する部分を含んだ習俗としての葬制のあり方を示す側面である。前者の側面は、葬制が何らかの形でそれを生み出した社会

の社会関係を反映するものに他ならないが、この点では、大名墓が、將軍の墓に範をとり、それらの格差を含みつつも、なお一定の葬制を保持する規格性を有しているという点によく示されている。おそらくこの規格性は、武士階級の中の身分秩序の一定の反映であることはまちがいないが、それが武士階級の葬制の全体の中でいかなる位置を占めるかは類例の増加を持つ必要がある。……大名葬制の持ついま一つの側面、すなわち武士階級以外の多くの庶民と共通する習俗としての葬制を示す側面は、すでに述べたように人形の副葬などに認められる。また全てではないが錢貨を副葬する例などもこれに加えてよいだろう。」<sup>(28)</sup>とされている。

以下、鈴木氏の指摘を踏まえた上で埋葬施設・埋葬形態について見ていく。

埋葬施設はいずれも堅穴式の石室である。基本的な埋葬の手順は、①土坑を掘る↓②石室底面に石を敷く↓③石室側壁石を積む↓④石室内に遺骸や副葬品を納めた棺を埋葬する↓⑤石室と棺の間には、木炭や石灰を積める↓⑥石室に蓋石を載せる↓⑦墓標台石を据え、墓標を立てる。

おおまかに見れば、この手順で進められたと考えられるが、各大名家、埋葬時期の違いにより必ずしも均一ではない。

牧野家墓所の場合、基本的には、石室を長方形の板石で組み、その中に直方体の木棺を二重に収め、木棺と木棺の間に漆喰を流して密封し、石室と木棺との間には木炭を充填している。この方法は四代忠壽の墓から八代忠寛の墓に至る藩主・正室の双方に共通しており、銅板の墓誌を収める点も一致している。ただ、蓋石が一重のものと、二重のものとがみられた。<sup>(29)</sup>

池田忠雄墓の場合は、石室が石積みであり、二枚の長方形の大石を蓋石としている。木棺は残存しておらず、棺が一つなのか二つなのかは不明である。発掘中、極めて小さい球状の水銀がかなり発見されているが、朱・木炭・生灰・樹脂などによる防腐蚀置がほどこされた痕跡は認められていない。また、石室蓋石の上は粘土で固められ、礫と石室保護のためと考えられる延石が検出されている<sup>(30)</sup>。

伊達家三代廟所跡のうち、初代政宗の墓室は土壇を掘り、土壇内部に隅丸方形の墓壇を設け、その中に切石を組合せて石室を設けている。石室の周囲、墓壇の壁との空隙には粘土と礫石が交互に詰められ、墓壇が埋められている。石室の中央に石灰と木炭を積めた棺桶を安置し、その手前左側に副葬品を置き終ると蓋石をして、その上に土をかけている。その上面には粘土と礫を交互に積み重ね、霊屋の礫石が組み込まれていた<sup>(31)</sup>。

仙台藩主二代忠宗の場合も政宗と同様の方法で埋葬されているが、三代綱宗の場合は石灰によって密封された甕棺に納められていた。この甕棺はさらに木棺に納められており、石室と木棺の間は石灰で充填されていた。その後、石室上面まで漆喰を詰め、蓋石を載せている。蓋石の上面からは銅製ベルトが掛けられた石櫃が発見された。甕に納めた歯があり、綱宗の埋葬から三年後に追葬されたことがわかっている。石櫃の上面は、粘土と礫を積み重ね、霊屋の礎石が組み込まれている<sup>(32)</sup>。

以上の調査例を基に、大名墓の埋葬施設および埋葬形態をまとめてみると、石組みにより石室が構築され、蓋石がされている。また、木棺は基本的に「座棺」であり、遺体は防腐の処置が取られ埋葬されている。

牧野家墓所のように墓誌が納められている例もみられ、將軍家に倣った形態で埋葬されていることがわかる。ただ、將軍家においても初期の秀忠墓は棺が早桶形式であり、伊達家三代の中でも政宗墓がこの形式を取っているように、各大名家内においても時期的に埋葬形態の違いが認められる。一方、大名間でも霊屋の有無、墓標の形(角柱状・宝篋印塔・五輪塔など)、埋葬施設(石室規模)、埋葬形態(棺の形態および数・火葬の有無)などに形態上の差異を示している。これらが、宗教ないし信仰上の理由に基くものなのか、大名の中における家格・出自といった点に係るのか興味ある問題といえる。

## 第二章 月溪山南宗寺の南部家墓所

現在、青森県の史跡に指定されている一画には、寛文四年(一六六四)の八戸藩創設時の藩主直房(寛文八年没)から十一代麻子(大正二年没)までの歴代藩主の廓と、一段下った場所に家族墓の廓がある。

### (一) 藩主の廓

この廓には五輪塔十二基(初代藩主直房、八代藩主信眞墓の八基と、二代直政生母・八代信眞世子・九代信順室墓の四基)、角柱墓標二基(九代信順・十一代麻子墓)、墓前に奉納された石燈籠七十一基、奉納洗鉢七基がある。「図1」にその配置状況を示した。また、「表3」に十二基の五輪塔と角柱の墓標二基の埋葬者名およびその生没年月日を、没年順に示した。埋葬者の略伝と葬制の様子を述べ、墓所の形成過程を見て行く。

①清涼院殿前金吾次将天性自心大居士

この廓に最初に埋葬されたのは、初代藩主直房である。盛岡藩初代藩主南部利直の七男として、寛永五年（一六二八）盛岡で生まれた。<sup>\*</sup>母は盛岡藩士中里嘉兵衛正吉の娘（後の仙壽院）である。寛文四年（一六六四）十二月六日、兄重直の遺領のうち、陸奥国三戸（現、青森県）、九戸・志和（現、岩手県）三郡の内において二万石を賜り、この時居所を八戸に営む。同年十二月二十八日従五位下左衛門佐に叙任している。寛文七年五月初めて八戸入りする。翌寛文八年六月二十四日八戸において没している。享年四十一才。<sup>33</sup>なお、直房は盛岡藩の刺客により暗殺されたとの口承もある。

「直房公御一代集」には、「同八年七月朔日御尊骸南宗寺江御入、同五日御葬式、住持南溪和尚下火、御寿御四拾一、御法号 清涼院殿前左金吾次将天性自心大居士、御尊骸御焼場今ノ十三仏堂之石地藏之所也<sup>34</sup>」とみえ、遺骸は火葬され、焼場には十三仏が安置されたことがわかる。この十三仏は、元禄十三年（一七〇〇）の清涼院の三十三回忌に靈松院（直房正室）を施主として本寿寺（八戸市類家向田屋）<sup>35</sup>後方の茶毘所に造立され、のち来迎寺（八戸市朔日町）に移されたという。

寛文十三年（一六七三）にその廟所が建立された様子は「八戸藩日記」に詳しい。

六月十二日 晴

- 一、御玉屋御普請奉行中津山三右エ門、接待左太夫被仰付候也、
- 一、大工奉行上堀多左エ門、江釣子文左エ門被仰付也、

六月十三日 晴

一、南宗寺にて御靈屋新立御祝ニ御酒被遣、

六月十五日

- 一、川口六兵衛石切之御帳改候様ニと被仰付、

七月四日 晴

- 一、御石塔立申処地形付、申吉日今日ニ御座候由、東善寺被申上候付普請、

九月四日 晴

- 一、御玉屋御普請今日相済申候、門御人足上ケ可申かと中津山三右エ門御披露申上ル付、御普請相済申候ハ、上ケ申様ニと被仰付、<sup>36</sup>

六月十二日に普請奉行と大工奉行が任命されてから、十三日に御靈屋の新立、十五日に石切帳の改めが命じられた。七月四日には石塔を立てる吉日が今日であるとの東善寺（藩の祈禱寺、後豊山寺と寺号替え<sup>37</sup>）の申し立てにより普請が行われ、九月四日には御玉屋の普請が完了している。この廟所は、石塔が中心に立てられた一画をもって「御靈屋」あるいは「御玉屋」と呼ばれていたことがわかる。

〔図1〕中に見える石燈籠のうち、No①には「寛文十三<sup>癸丑</sup>年林鐘廿四日」（林鐘は六月の異名の銘があり、清涼院の命日に奉納されたことがわかる。御靈屋（御玉屋）造営はまさに清涼院の六回忌に合わせたものである。

一方、五輪塔の後に奉納された石燈籠No②△には「清涼院殿御廟前」・「奉寄進石燈籠」・「寛文拾貳<sup>壬子</sup>年六月廿四日」、各奉納者名が四面に刻まれており、御靈屋（御玉屋）造営前年の命日に建立されていることがわかる。



この御霊屋（御玉屋）が完成した半年後には、大地震で石塔や石燈籠が被害を受けていることが「八戸藩日記」に見える。

延宝二年三月十日

- 一、今朝辰ノ刻大地震御城方々破損、
  - 一、諸役人方へ方々破損取繕申様ニと被仰渡、
  - 一、南宗寺より被申上候、今朝之地震ニ而御玉や御石塔并石燈籠ころひ申候、御人足可被遣候よし被申上、則中津山三右エ門被仰付、<sup>(38)</sup>
- 御霊屋に藩祖を祀る廟堂等が建立されていたかどうかは不明である。むしろそうした建物がなかったことを示す記事が、「八戸藩日記」元禄十二年（一六九九）の条に見える。

八月七日 晴山瀬風吹

- 一、清涼院様、仙寿院様、天岸院様御石塔、天祥院様雨覆御普請被成候付、舟越清右衛門奉行被仰付、
  - 一、奥寺庄之助儀、右御普請ニ付、釘奉行被仰付、<sup>(39)</sup>
- この普請は、天祥院（二代藩主直政）の霊屋石塔が完成する元禄十二年七月十二日以後の事であり、それまでは石塔を覆う施設もなかったことがわかる。このことから考えると、八戸藩では廟堂といった形のものとは当初から建立せず、玉垣等で囲んだ霊域をもって、「御霊屋」あるいは「御玉屋」と尊称したものと考えられる。

清涼院の法事に関する記事は、「八戸藩日記」中、寛文八年（一六六八）の没年・元禄七年（一六九四）の十七回忌・元禄十三年（一七〇〇）の三十三回忌・享保二年（一七一七）の五十回忌・慶応三年（一八六七）の二百回忌などに見られる。法事に際して、赦免が行われた様子を「八

戸藩日記」元禄七年の条から引用する。

六月十八日 晴

- 一、先年御追放被成候杉本与申山伏、此度御法事ニ付、而御赦免被成度来迎寺御町奉行へ内願ニ申上付、而御町奉行右之段被申上願之通御赦免被遊之趣、撰待小右衛門ニ被仰渡之、

六月廿五日 晴

- 一、鳥屋部平助儀、弟五郎助共ニ閉門之儀御赦免、於南宗寺去ル廿三日右之旨被仰渡、則日より平助相勤申候、尤親馬右衛門儀も遠慮御赦免被仰渡候、<sup>(40)</sup>

以後、法事に際して赦免が恒例化している。

②天祥院殿前遠州大守月礪宗真大居士

二代藩主直政は、直房の嗣子として、寛文元年（一六六一）盛岡で生まれた。母は盛岡藩士川口源之丞の娘（後の霊松院）である。<sup>\*</sup>同八年八月二十一日遺領を継ぐ。延宝二年（一六七四）十二月二十七日従五位下遠江守に叙任している。貞享四年（一六八七）九月十八日詰衆に列し、元禄元年（一六八八）九月十二日御側となる。二年正月二十六日務を辞し、元禄十二年二月十六日、江戸において没している。享年三十才。なお、直政の墓は金地禅林にもある。

『八戸藩史料』によれば、直政は江戸麻布市兵衛町（現、東京都港区六本木一丁目九番）の江戸屋敷<sup>(41)</sup>において死去している。三月十八日の夜に遺骸が芝金地院へ入寺し、桐谷において荼毘に付されている。井上主馬（江戸表留守居役加判役）をはじめとする十二人が集灰している。その後、中里弥次右衛門外近習役と共に遺骨を金地院へ奉送している。二

十日より二十二日まで三日間、金地院において法会が行われ、二十三日には金地院を発して四月十一日、八戸の南宗寺に着き、同十四日より二十日まで同寺において法会が行われている。<sup>(42)</sup>天祥院の御霊屋が普請される様子を「八戸藩日記」元禄十二年の条から引用する。

四月朔日 晴天

一、山崎勘兵衛儀、天祥院様御霊屋御普請奉行被仰付之、

一、角沢左太夫、御霊屋御ふしん奉行被仰付、

四月八日 曇天昼より晴

一、舟越与次右衛門、山崎勘兵衛相役、御霊屋普請奉行被仰付候、

五月朔日 晴

一、江戸江御廟所御霊垣之儀ニ付而先達而石ニ而可被遊哉之由、煙山七郎兵衛より内状ニて申来候付、今時分ハ高野ニ而も諸大名様方御石塔霊垣木ニ而被仰付、尤石ニ而被成候儀結構之様ニ御座候へ共、地震などニてゆかミなと仕候へハ直し候事も成にくき事之由ニ付、而御霊垣木ニて被仰付可然哉と為御相談井上主馬、煙山七郎兵衛方迄盛岡便ニ為可被遣、あなた御老中迄御頼被成候事尤江戸状被遣候、

五月十五日 晴

一、御廟所御普請奉行山崎勘兵衛、船越与次右衛門被仰付、大方御普請相済候ニ付、而御堀之内へ一切出入仕間敷候由、札三枚此外長者山へ三枚、放馬不浄の輩不可入并小松ニ而も切取申立まじきよし御立被置候事、

五月十六日 晴天

一、御霊屋江御骨御鎮座被遊ニ付、而清左衛門、惣右衛門其外御役人

方御寺へ参詣、何茂御焼香被勤候、

六月朔日 曇少雨東風吹

一、舟越与次右衛門、御廟所御普請奉行御免之、

六月十二日 雨

一、御石塔下奉行、北田市右衛門被仰付候、

七月十二日

一、天祥院様御石塔石切三人、御石塔出来申付、明十三日盛岡へ御返被成候、就夫松井作太夫方へ礼状被遣御伝馬三疋借被遣ル、

七月十三日 晴

一、御石塔出来御供養御座候付、而御老中中里清左衛門、戸来惣右衛門其外御役人方参詣、御焼香有之候、

七月十九日

一、天祥院前御石塔石切雇賃、其外御入方都合拾六両ト錢貳百五拾六文、書付山崎勘兵衛披露有之候、<sup>(43)</sup>

四月一日に御霊屋普請奉行が任命されてから、六月一日に御廟所普請奉行が免ぜられる二ヶ月の間に、江戸へ廟所玉垣の件について照会が行われている。先述した延宝二年（一六七四）三月十日の大地震のような例もあり、廟所の玉垣は木によって作ることになったものである。六月十二日には御霊屋石塔下の奉行が任命され、七月十二日には石塔（天祥院墓標の五輪塔）が完成している。石塔石切の三人が盛岡からきていることは、大名墓の造営に携わる程の熟練した石工が、まだ八戸には居なかったであろう。八戸藩における歴代の藩主・正室・子女等の葬儀方を司どる担当部局、石工棟梁が存在したのかどうかという問題と考え

合わせてみると興味深い。

また、江戸の金地禅林と領国の南宗寺に墓が建立されている点については、八戸藩南部家の葬制を考える上で重要な課題と思われる。天祥院墓の他にも類例があるので、最後にそのまとめをすることにしたい。

### ③ 霊松院殿法霊宗珠大姉

霊松院は、初代藩主直房の正室である。盛岡藩士であった川口源之丞の娘であり、寛文元年（一六六一）盛岡で二代藩主となる直政を出生している。寛文四年の八戸藩創設の翌年八月に、世子武太夫（後の直政）・次男運吉（後の直常）・仙寿院（直房母）と共に八戸に入っている。寛文八年六月の直房の死去に伴い、落髪して霊松院と称したのであろう。同年十月、仙寿院・運吉と共に江戸へ上っている。寛文九年三月五日、江戸において直政妹の富姫を出生する。<sup>(45)</sup> 正徳三年（一七一三）五月二十日、江戸において没している。なお、霊松院の墓は金地禅林にもある。

將軍・藩主とその一族の死去に際しては、必ず鳴物の停止が触れられている。霊松院の忌中に際しての停止事柄を「八戸藩日記」より引用する。

六月朔日 晴

#### 一、霊松院様御遠行付御停止之覚

一、狛師壬五月廿八日より六月一日迄三日御停止、一、市町右同断三日御停止、一、魚鳥売買ふり売ミセ売三日御停止、一、作事ハ壬五月廿八日より六月五日迄御家中ハ七日御停止、町在々ハ三日御停止、一、鳴物壬五月廿八日より六月廿日迄御停止、尤七日過候ハ、座当之儀仏事などへ参上るリハ不苦、小うた遊山かましき儀堅無用、一、

御家中さかやき壬五月廿八日より六月一日迄三日遠慮可仕事、

右の通御家中町在々江被仰渡、<sup>(45)</sup>

停止事柄は狛・魚や鳥の売買・作事・鳴物の停止となっている。

三十五日の法事が、六月九日より十一日まで南宗寺で行われた後、四十九日の法事に際しての諸役が任命されている。七月七日より九日まで南宗寺において、四十九日の法事が執行されている。霊松院の遺骨は、九月十六日に南宗寺に入っている。

廟所普請の様子をみると、

正徳四年二月十九日

一、竹花清兵衛儀、霊松院様御石塔御立被遊候付、石切奉行被仰付、

四月廿一日 晴

一、霊松院様御石とう、明日は川より御くはらせ被成候付、御奉行竹花清兵衛被仰付并御人足廻し御足輕三人被仰付、

五月十八日 晴

一、竹花清兵衛先達而御石塔奉行被仰付候所、今日相仕廻披露、<sup>(46)</sup> 二月十九日に石切奉行が任命され、石塔の石が四月二十一日に、是川（現八戸市）から切り出されている。五月十八日には普請が完了している。

#### ④ 三玄院殿前遠州大守法林徹証大居士

三代藩主通信は、盛岡藩三代藩主南部重信の四男として、延宝元年（一六七三）盛岡で生まれた。<sup>\*</sup> 母は盛岡藩士枋内金右衛門の養女澤（後の浄生院）である。八戸藩二代藩主直政が嗣男に恵まれなかったため、元禄十一年（一六九八）十二月三日に直政の養子となった。翌十二年五月十

三日遺領を継ぐ。宝永六年（一七〇九）四月十五日には、従五位下遠江守に叙任している。享保元年（一七一六）八月二十四日、八戸において没している。享年四十四才。

藩主死亡の当日には、早飛脚で江戸に書状が送られている。また、藩主の遺言に従い、朱印状その他天祥院（二代藩主直政）より拝領の品々の箱づめが行われた。前例に従い、鳴物等の停止が指示されている。

翌二十五日には牌名を江戸へ通知し、藩主の遺言が家中へ伝えられた。

二十六日には、家老・用人・吟味・者頭・目付・寺社町奉行・勘定奉行等の立ち会いのもとで墓所の見分が行われると共に、葬式準備に南宗寺破損修繕等の諸普請奉行が任命されている。同日には、三代藩主通信の生家である盛岡へも、死亡の通知が届けられ、普請三日・鳴物七日の停止が城下に触れまわされたことが、「雑書」（盛岡藩家老の執務日誌）の享保元年八月廿六日の条に見える。<sup>(48)</sup>

二十七日には、南宗寺門番・廟所ならびに葬礼場の普請惣奉行が任命されている。

九月一日には、遺体が城中より南宗寺へ入り、遺体番人が任命されている。

九月十五日には、江戸よりの飛脚が致着し、公儀へ宮内（三代藩主通信の世子、四代藩主廣信）の家督相続願ひ、藩主通信の死亡の届け出が無事終了した旨が報告された。

九月二十七日より二十九日迄、三十五日の法事・十月二日に葬礼が盛岡藩の名代を迎えて行われている。

十月五日には喪中期間のため、停止されていた普請・十月十五日には

家中の月代きつやきが解除になっている。

宮内の家督相続願ひは、十月十六日に認められ、十一月一日に將軍家に初めて御目見得し、三玄院遺物の刀を献上している。

十二月一日には、三玄院の位牌等が江戸より致着し、南宗寺へ納められている。翌二日〜四日迄南宗寺において、三玄院百ヶ日の法事が行われた。

三玄院の法事に関する記事は、「八戸藩日記」中、享保二年（一七一七）の一週忌・享保七年の七回忌・享保十三年の十三回忌・寛延元年（一七四八）の三十三回忌・文化十二年（二八一五）の百回忌などに見られる。

図正見院殿前甲州太守覺雲宗知大居士

四代藩主廣信は、通信の嗣子として、宝永三年（一七〇六）八戸で生まれた。母は桂七郎大夫の妹類（後の實相院）である。<sup>\*</sup>享保元年（一七一六）十月二十六日遺領を継ぐ。享保五年十二月十八日従五位下甲斐守に叙任している。寛保元年（一七四一）五月二日、江戸において没している。享年三十六才。なお、廣信の墓は金地禪林にもある。

廣信の没日については、『八戸藩史料』には「実は四月廿九日に薨ぜられしも未だ繼嗣出願前なるを以て五月二日と届出たり」とみえる。<sup>(49)</sup>五月十二日には、八戸家中総代として松井九郎右衛門が江戸に致着している。八戸においては、七ヶ日毎に霊供料として金二百足が南宗寺に差し出されている。藩主が江戸において没しているのは、天祥院（二代直政）が最初であり、その前例に倣って埋葬されたと考えられる。

〔龍津院殿前左金吾袂尉珠厳宗湜大居士〕

五代藩主信興は、廣信の嗣子として、享保十年<sup>(50)</sup>（一七二五）江戸で生

まれた。母は江戸商家の娘藤枝（後の榮松院）である。<sup>\*</sup>元文五年（一七四〇）十二月に初めて將軍家に御目見得し、寛保元年（一七四一）六月二十四日遺領を継ぐ。同年十二月十九日從五位下左衛門佐に叙任している。延享三年（一七四六）七月十八日遠江守に改め、明和元年（一七六四）閏十二月二十一日左衛門尉に改めている。明和二年（一七六五）五月二十九日隱居願いが認められている。安永二年（一七七三）八月十三日、八戸において没している。<sup>(31)</sup>享年四十九才。

大殿様死亡の当日には、葬式御用係の任命が行われている。

八月二十日には、遺体が南宗寺に入り、二十三日には仮葬が行われている。二十六日には、二十七日の法事が行われている。

二十七日には、葬送の役掛・九月一日には棺添人が任命されている。五日に葬儀が行われ、十八日には三十五日の法事が行われた。

九月十八日には龍津院の法事に際し、牢舎の者共の恩赦が行われた。

安永八年（一七七九）の七回忌・寛政元年（一七八九）の十七回忌の法事に際しては、領内の諸寺院より赦免願いが出された人々に恩赦が行われている。

〔宝性院殿前甲州大守禅岩宗安大居士〕

六代藩主信依は、信興の嗣子として、延享四年（一七四七）江戸で生まれた。母は信興の正室・莊嚴院（織田肥前守輔世の娘）である。<sup>\*</sup>宝暦十二年（一七六二）十二月に初めて將軍家に御目見得し、明和二年（一七六五）五月二十九日家督を継ぐ。同年十二月十八日從五位下甲斐守に叙任している。天明元年（一七八一）二月十四日に隱居願いが認められている。天明元年六月七日、江戸において没している。享年三十五才。

十月二十五日には、宝性院の三十五日・四十九日・百ヶ日の法事に際し、領内の諸寺院より赦免願いが出された人々に恩赦が行われている。寛政九年（一七九七）の十七回忌・文化十年（一八一三）の三十三回忌の法事に際しても恩赦が行われている。

〔簫成院殿韶巖宗儀大居士〕

信經は、八代藩主信眞の嗣子として、寛政十年（一七九八）八戸で生まれた。母は琴である。文化十三年（一八一六）七月に元服、同年八月二十九日に松平丹波守光年妹壽姫と婚約する。文化十四年（一八一七）二月に初めて將軍家へ御目見得している。文政元年（一八一八）十一月に結婚披露が行われた。天保四年（一八三三）十月十六日、江戸において没している。享年三十三才。十八日には信經の夫人は薨髪し、齡松院と称した。<sup>(32)</sup>簫成院の墓は金地禅林にもあり、天祥院（二代直政）・正見院（四代廣信）の前例に倣って埋葬されたと考えられる。

〔仙溪院殿前勢州大守仁道宗壽大居士〕

七代藩主信房は、信依の嗣子として、明和二年（一七六五）江戸で生まれた。母は梅（後、瑞心院）である。<sup>\*</sup>安永九年（一七八〇）十一月に初めて將軍家に御目見得し、天明元年（一七八一）二月十四日家督を継ぐ。天明二年十二月十八日從五位下内藏頭に叙任している。寛政七年（一七九五）四月三日伊勢守に改め、同八年二月十三日に隱居願いが認められている。文化八年（一八一）五月二十五日、伺の通り剃髪し、伊勢入道と号した。<sup>(33)</sup>天保六年（一八三五）五月十二日、江戸において没している。享年七十一才。六月十二日には信房の夫人は薨髪し、寶體院と称している。<sup>(34)</sup>

信房の没日について「八戸藩日記」では次のように記している。

五月廿四日 晴

一、大殿様御太病之趣申来候得共、御内実之処十二日巳之刻被遊御遠行候事故、御祈禱等不被仰付候、尤御用人為御機嫌窺被差上候、御例之処前より之御次第故不被仰付候、

一、大殿様去ル十二日より御変症被為有、十六日巳刻不被為叶御養生被遊御遠行候段、此度御便申来之、

一、右二付南宗寺江寺社奉行を以御遠行之旨申達、尤来ル廿六日より

二夜三日御法事被遊候旨、是亦寺社奉行を以被申達之、<sup>(55)</sup>

このことから、実際に信房の没したのは五月十二日でありながら、五月十六日没として公儀へ届け出されたことがわかる。

浦井正明氏によれば、江戸後期の將軍の場合、実際の没日と公表日には約一ヶ月もの差があり、死後の一応の段取りがつくまでの期間はあえて公表を避けていたと考えられるという。<sup>(56)</sup> 將軍家程でないにしても、信房はすでに隠居の身で、弟の信眞が家嗣を継いでいること、藩内での葬儀等の段取りの都合により、五月十六日没として公儀へ届け出したものと考えられる。

なお、南宗寺および金地禅林にある墓には「五月十二日」と実際の没日が刻まれている。また、「八戸藩日記」天保十三年（一八四二）の五月十二日の条には、「一、仙溪院様御祥忌ニ付、若殿様御代香烟山齊宮右相勤候段申出之」<sup>(57)</sup>とみえ、五月十二日を忌日としていたことがわかる。

⑩梅林院殿檀岸宗海大居士

信一は、八代藩主信眞の次男として、寛政十一年（一七九九）江戸で

生まれた。母は百合である。文化十三年（一八一六）七月に元服。天保四年（一八三三）十月に兄の信經死去の後、天保五年十一月嫡子の願いが許可されている。翌六年三月に初めて將軍家へ御目見得している。天保八年十二月十三日、江戸において没している。<sup>(58)</sup> 享年三十九才。梅林院の墓は金地禅林にもあり、簫成院（兄の信經）に倣って埋葬されたと考えられる。

⑪惇徳院殿前左金吾枳尉仁峰宗榮大居士

八代藩主信眞は、信依の四男として、安永七年（一七七八）江戸で生まれた。母は織瀬（後の量壽院）である。<sup>\*</sup> 兄、信房（七代藩主）が嗣子に恵まれなかったため、寛政七年（一七九五）九月十四日に信房の養子となった。同年十一月に初めて將軍家に御目見得し、翌八年二月十三日に家嗣を継ぐ。同年十二月十九日從五位下左衛門尉に叙任している。<sup>(59)</sup> 天保十三年（一八四二）五月十一日に隠居願いが認められている。<sup>(60)</sup> 弘化三年（一八四六）十二月二十九日、江戸において没している。享年六十九才。

信眞の没日について「八戸藩日記」では次のように記している。

弘化四年正月廿二日

一、大殿様御儀兼而御不例被為入候処、不被為叶御養生去ル十二日御遠行之趣被成御届候段被申達之、御番頭、座上御番頭、御番頭並、御者頭、御者頭格、御用人、御吟味、御目付、同格御勘定頭、御側頭取、御刀番右何連も於御席、<sup>(61)</sup>

このことから、「八戸藩日記」では大殿様（信眞）の没日を弘化四年（一八四七）正月十二日としていたことがわかる。

一方、信眞の没日を弘化三年（一八四六）十二月二十九日とする史料がある。この史料は、八戸市在住の石橋弘氏が所蔵する「御家譜抜書」であり、九代藩主信順の家督相続までを記す「八戸南部家」系譜の抜書である。巻末には初代直房から八代信眞までの藩主の戒名・没年月日・享年・葬地を記した後に、「藤原勝周主」と持ち主の名を書いたものである。

一、天保十三<sup>寅</sup>五月 御隠居

御壽 御治世

御治名 弘化四<sup>未</sup>正月十二日於江府

御遠行

惇徳院殿前左金吾校尉宗栄大居士

実 弘化三年十二月廿九日御遠行

この「御家譜抜書」は、表向きには信眞の没年月日を「弘化四年正月十二日」とするのが、実際は「弘化三年十二月廿九日」が命日であることを指している。筆者が先に藩主の略伝を紹介するにあたって引用してきた「元八戸南部家系」（『寛政重修諸家譜第二編』）や、八戸南部家文書弘化三年「系譜」には、残念ながら信眞の没年月日については記入していないが、「御家譜抜書」や「八戸藩日記」の記述から推定すると、公儀へは「弘化四年正月十二日」として届け出したものと考えられる。

なお、「御家譜抜書」の記述を裏付けするものとしては、南宗寺と金地禅林に建立されている信眞墓の碑名がある。先に、仙溪院（七代藩主信房）の没日について触れたように、死後の一応の段取りがつくまでの期間あえて公表を避けていたものと考えられる。

#### ⑫常行院殿寂室妙照大姉

常行院は、九代藩主信順の正室である。八代藩主信眞の八女として、天保七年（一八三六）江戸で生まれた。母は菊である。信眞の世子・信經（簫成院）が天保四年、信一（梅林院）が天保八年相繼いで死去したため、天保九年四月に、島津重豪五男の信順を養子に迎え、嘉永三年（一八五〇）六月十五日、常行院が信順の室となっている。<sup>(63)</sup> 元治元年（一八六四）十二月二十三日、八戸において没している。<sup>(64)</sup>

「八戸藩日記」と「御用人所日記」から常行院の葬儀準備の段階まで紹介する。

元治元年十二月廿三日

一、奥様御儀、兼而御不例之処御養生不被為叶昨夜戌之上刻被遊御遠行候段、相心得候様被申達、御番頭、座上御番頭、御番頭並、御者頭、御者頭格一列、御用人一列、御吟味、御目付、同格御勘定頭、御側頭取、御刀番一列右何連茂於御席、

一、奥様御法号、南宗寺より差上、寺社奉行差上左之通

常行院殿寂室妙照大姉 （日記）

一、奥様御葬送之節、御供女中左之通為、支度金表より被下相成る、三両ツ、老女若浦、中老金崎、式両式歩中老格村尾、式両ツ、御側その、多美、壹両式歩ツ、御次志け、ゆう、壹両一分御次格喜多、壹両御茶ノ間宿木、右齡操院様御遠行之節、之御振合を以談之上御席江申出被下候事、<sup>(65)</sup> （用）

「八戸藩日記」では、常行院の没日は十二月二十二日としている。ここでは南宗寺および金地禅林の墓碑名から十月二十三日とした。

信順室の死去の後、御番頭をはじめとする諸役にその申達がされている。申達された諸役は惇徳院（八代信眞）と同様である。八戸藩における歴代の藩主・正室・子女等の葬儀方を司どる担当部局というよりは、表方・勝手方の各代表諸役である。三玄院（三代通信）の墓所見分の際にも、用人・吟味・者頭・目付・寺社（町）奉行・勘定頭等が立ち合っている。また、臨時的に廟所ならびに葬礼場の普請奉行・葬儀方の諸役が任命されている状況を考え合わせると、葬儀方を司どる担当部局が設置されていたのではなく、藩全体で対処したものと考えられる。

正室等の奥向きの葬儀に際しては、齡操院（八代信眞世子の信經室）の前例に倣って常行院の葬送が行われたように、奥に使える老女等の果す役割が大きかったものと考えられる。側室、特に藩主の生母などの場合はこれに倣った形で葬送が行われたものと推測される。

### ⑬ 従四位源朝臣南部信順之墓

九代藩主信順は、薩摩藩主島津重豪の五男として、文化十年（一八一三）江戸で生まれた。<sup>66</sup>母は八重である。八戸藩八代藩主信眞の世子信經・信一が相継いで死去したため、天保八年（一八三七）四月に養子として八戸藩に迎え入れられている。翌九年四月二十七日に信眞の躰養子に迎え入れられている。同年十二月一日に、初めて將軍家に御目見得し、同月十六日に従五位下伊勢守に叙任している。信眞の八女・鶴姫（常行院）と嘉永三年（一八五〇）六月十五日、婚姻している。<sup>67</sup>天保十三年五月十一日に家嗣を継ぐ。翌十四年十月十一日に遠江守に改めている。明治二年（一八六九）の版籍奉還後の六月二十七日に八戸藩知事に任命されている。同年七月十五日には免職された。明治四年（一八七一）十一月五

日に隠居願いが認められている。翌五年二月二十日、八戸において没している。享年六十才。信順は神葬祭で埋葬された。

神葬祭に至る経過について、八戸藩の「御用人所日記」・「御家扶所日記」からその様子を見てみることにする。

明治二年十月十六日

弁務江口達

一、先般版籍奉還被撥候ニ付、士族一統并社寺給禄ともニ被差上候事ニ相心得可申事、但当月十二月まで被下身帯并拜知諸收納共是迄之通被仰付候事、<sup>68</sup>

（用）

十一月廿七日

一、今般御改革ニ付給禄更ニ下賜候ニ付、社家四人、寺院内外拾五ヶ寺より御肴茂差上候、目録并面付帳大権参寺被相渡之及言上、<sup>69</sup>

（用）

版籍奉還により、明治二年（一八六九）十月十六日に、士族と社寺の給禄返上が口達されている。但、十二月まではこれ迄の通りであるという。十一月二十七日には、社寺へ給禄が下賜された御礼として、社家四人および寺院内外十五ヶ寺より着代が献呈されていることがわかる。「今般御改革ニ付」とは、同年十一月一日に、朝廷の旨に依準した形で定められた士族の給禄のことであろう。士族同様、社寺への給禄も決められたものと思われ、十一月十一日には南宗寺へ給禄十五俵が下賜されている。<sup>71</sup>

明治四年二月九日

一、南宗寺呼上左之通相達



是迄齋藤家御宗者南宗寺御墓<sup>(マツ)</sup>堤所之處、以来神葬祭被改、長者山新羅社を以御代々靈社与被定御祭典被為行候条、此段為心得相達候事、

二月九日

右之通之書取を以相達、尤御祭典被為行候迄者、是迄之通相勤居候様申達置候事<sup>(72)</sup> (家)

これによれば、これ迄南宗寺を墓所として来たが、これより神葬祭に改め、長者山新羅神社（現八戸市長者一丁目所在）を以つて、代々の靈社とするものである。この達しに対し、南宗寺より位牌の頂戴願いが提出され、南宗寺へ以後の代香を取り止めている。

明治四年十一月十四日

一、南宗寺より左之通願書出

口上

是迄一字御建立之御菩提所以来神葬祭御改、長者山新羅社御代々御靈社と御定御祭典被為行候条、当二月御達ニ付、御年回御法事ホ御廃止之義と奉存候、然処此度御代々様御位牌被游御埋候段御沙汰御座候ニ付、奉歎願候、当寺是迄十二世連綿任職被仰付、御重恩重疊難有仕合奉存候御時勢ニ付、神葬御祭式被仰付候共、本山向全廃仏之典ニ茂無御座候間、御仏牌之義者奉始御先祖様外寺院共御同様ニ可被仰付義ニ御座候間、当寺御安置御位牌頂戴被仰付置被成下候様願上候、左候得者仮令御取扱無被成下様共心得次第三時勤行仏門規則相立居申度候、右之趣不苦思召候ハ、御序之節、宜御取成被仰上被成下度此段奉願上候、以上、

十一月

右願之通被仰付

十一月十五日

一、御位牌南宗寺江願之通被成下候ニ付、以来御代香御免被成候旨、御家令中被相達之御家大從江も同様被申達之、<sup>(73)</sup> (家)  
また、南宗寺の末寺であつた禅源寺からも位牌の頂戴願いが提出されている。

十一月十八日

一、禅源寺江御安置之御子様御位牌、今後神葬祭御祭典ニ付、御引揚被仰付候処左之通、

口上

御子様御位牌是迄寺務御回向相勤来候処、今後更頂戴被仰付被成下度此段奉願上候、以上、

十一月十八日

禅源寺

右之通被仰付、<sup>(74)</sup>

(家)

八戸藩が神葬祭とした契機は、慶応四年（一八六八）三月に新政府より発令された神仏分離令に端を発した神道国教化政策によるものと思われる。<sup>(75)</sup>「御家扶所日記」から御神靈祭の式典およびその後の様子を引用する。

明治四年十一月廿八日

一、御神靈御祭典式ニ付、当役治実并御家大從村木壮御家少從石井謙吾熨斗上下着用、四ツ時過より相揃八ツ時過無御滞相済、

十二月九日

一、神葬祭御典式被為濟候ニ付、御代々御正統様御祥忌日御霊社江御代参御家令、御家扶之内より相勤候事、

一、御神葬御祭典ニ、御位牌不残御焼却可被成候処、南宗寺願申上被下ニ相成、同寺限ニ而永々御供養申上度趣ニ付、此度限金拾兩被成下、且又御霊屋之義者是迄之通被差置候事故、氣ヲ附折々掃除ホ致候様、尤年々少々宛ハ御扱茂可被成下旨共申達御請申出及言上、<sup>(76)</sup>

十一月二十八日に御神霊祭の式典が行われ、翌二十九日には代々の忌日に御霊社へ代参することが定められている。また、永代供養を申し出、位牌の頂戴願いが認められた南宗寺に金十両が支給されている。

明治五年（一八七二）二月二十日に旧藩主信順が死去の後、当日には家扶の逸見正巳の名をもって死去の報告が青森縣出張所へ提出されている。同月二十二日には、葬式祭主に中居嘉治馬（神明宮神主）、副祭主に坂本丹宮（龍神社神主）が任命され、二十八日出棺し、廟所に入っている。神葬祭で行われたため、出棺行列の構成は神官を中心とするものになっている。明治六年七月二十日に、故信順の遺齒は玄中寺（現八戸市柏崎五丁目所在）に納められ、永代日牌料として百円が同寺へ支給されている。<sup>(77)</sup> 八戸藩代々の廟所であった南宗寺以外の地に、遺齒が納められたのは、故信順の信仰を得たためであり、玄中寺（日蓮正宗）は藩主の別荘地の田屋跡に建立されている。<sup>(78)</sup>

#### ④南部麻子之墓

旧八戸藩十一代の麻子は、盛岡藩十四代藩主南部利剛の二女として生まれた。明治四年（一八七二）四月九日、盛岡より九代藩主信順の世子・榮信との間に嫡子なく、榮信死去の後、明治九年五月十一日家督を継ぐ。

明治十一年五月に家督を養子利克（旧盛岡藩十四代藩主利剛の十一男）に譲り、隠居している。大正二年（一九一三）十二月二十二日、八戸において没している。享年五十六才。

これまで、南宗寺の藩主の廟に埋葬された人々の略伝と、葬制の様子を見て来た。この廟に埋葬された人々の中で、②天祥院（二代直政）・③霊松院（二代直政生母）・⑤正見院（四代廣信）・⑦宝性院（六代信依）・⑧簾成院（八代信經嗣子の信經）・⑨仙溪院（七代信房）・⑩梅林院（八代信經世子・信一）・⑪惇徳院（八代信眞）・⑫常行院（九代信順正室）の計九人が金地禪林にも墓が建立されている。これらの人々は全て江戸で死去している。ここで問題となるのが、どちらに遺骨が埋葬されたのかということである。

公儀へ提出している家譜（「寛政重修諸家譜」）には江戸で没した藩主・世子について、「芝勝林山金地院江葬」と書き上げられていることから、江戸で没した人については、江戸の金地禪林に遺骨が埋葬されたと考えられる。その際、南宗寺の墓所には分骨あるいは遺髪・遺齒・愛用の品々などの形で、埋葬されたものと思われる。これは、三味墓と参り墓と、<sup>さんみ</sup>という「両墓制」の現れと考えられる。

#### （二）家族墓の廟

この廟には五輪塔三基、自然石の墓標二基、舟形墓標九基、角形墓標に笠のつくもの一基、角柱墓標十二基、舟形光背に仏像を半肉彫りした墓一基、墓前に奉納された石燈籠六基がある。「図2」にその配置、「表4」・「表5」に埋葬者およびその生没年月日を示した。

①仙壽院殿松嶺妙閑尼大姉

この廓に最初に埋葬されたのは、初代藩主直房の生母・仙壽院である。盛岡藩士中里嘉兵衛正吉の娘であり、盛岡藩初代藩主南部利直の側室となり、寛永五年（一六二八）盛岡で直房を出生している。延宝元年（一六七三）十月二十五日、江戸において没している。享年七十才<sup>79</sup>。

遺骸は江戸表を十月二十七日に発し、十一月十四日に八戸へ致着している。この間に、遺骸を迎えの諸役が任命され、十一月五日には大工ならびに掃除奉行が任命され、藩の祈禱寺である東善寺から葬礼の日取りが提出され、十八日に葬儀が行われた。十九日には、遺骸に付き添って来た金地禅林の僧が、江戸へ出立のため付き添いの小者が派遣されている。十一月二十日に、遺骸は火葬されている<sup>80</sup>。茶毘の地に一小庵を建て、仙壽庵と称した。後に、仙壽寺と改め南宗寺に属し、南宗寺二世江心全理和尚を開山としている。

②天岸院殿江嶽宗霊大居士

直常は、初代藩主直房の次男として盛岡で生まれた。母は霊松院である。寛文五年（一六六五）八月に、兄武太夫（二代藩主直政）・霊松院・仙壽院（直房母）と共に八戸入りしている。延宝八年（一六八〇）六月二十二日、江戸において没している。享年十七才。なお、金地禅林にも墓が建立されている。

③操松院殿貞室妙清大姉

富姫は、初代藩主直房の長女として、寛文九年（一六六九）江戸で生まれた。母は霊松院であり、二代藩主直政（天祥院）、直常（天岸院）が兄にあたる。幕臣市橋左京政勝の室となり、後離縁している。享保三年

（二七一八）八月八日、江戸において没している。享年五十才。金地禅林にも墓が建立されている。七日間の鳴物停止等が触れられている<sup>81</sup>。

④瑚林妙珊童女

圓姫は、四代藩主廣信の長女として、享保九年（二七二四）八戸で生まれた。母は窪田半左衛門の娘・みせ（後の慈照院）である。享保十年六月一日、八戸において没している。享年一才。

葬礼行列の構成は、駕籠舁四人・先供三人・挑灯持四人・未役人二人・未番人二人・長刀・挟箱・長持各一人・御供一人であり、南宗寺に町奉行が詰めている<sup>82</sup>。以下、幼児の葬礼は同様の構成で行われたものと考えられる。

⑤蘭庭慧秀童子

熊次郎は、四代藩主廣信の次男として、享保十五年（二七三〇）八戸で生まれた。母は圓姫と同じく、慈照院である。享保十六年九月十六日、八戸において没している。享年一才。

御機嫌伺いのため、年寄中・番頭・同並・用人・者頭・取次・徒頭・惣役人・医師らが参上している。いずれも羽織袴着用とみえ、お悔みに際しての羽織袴の着用が定められていたものと思われる<sup>83</sup>。

⑥慈照院殿月空清心大姉

慈照院は、四代藩主廣信の側室・みせである。窪田半右衛門の娘であり、享保九年（二七二四）と、享保十五年にそれぞれ圓（瑚林妙珊童女）・熊次郎（蘭庭慧秀童子）を出産している。寛延三年（一七五〇）十二月十日、八戸において没している。三日間の鳴物停止が触れられている。

⑦幻體了有禅童女 宝暦二<sup>壬申</sup>六月初五日

五代信興の姪・於佐那である。この墓は、舟形光背に仏像（地藏菩薩）を半肉彫りしている。地藏菩薩は頭を丸め、身に納衣・袈裟をまとう僧形で、左手に宝珠をもち、右手に錫杖をもつ立像が一般的である。死者を解脱の道へ導く姿として一般化したものと考えられている<sup>(84)</sup>。

⑧ 是心天空禪童女

〈不詳〉

狐雲子影禪童女

「是心天空禪童女」は、五代藩主信興の次女・徳子である。宝暦四年（一七五四）八戸で生まれた。母は信興の側室・きし（苦米地又兵衛娘）である。同年五月二十三日、誕生の翌日、八戸において没している。享年一才。

「狐雲子影禪童女」は、六代藩主信依の娘源子であり、宝暦八年（一七五八）没。

⑨ 如幻了夢童女 宝暦八<sup>戊寅</sup>歲五月十八日

⑪ 性空禪童女 安永二<sup>巳</sup>六月廿一日

⑨・⑪ 共に五代藩主信興の子女である。

⑩ 圓客童女 圓圃田<sup>甲</sup>三月十一日

狐園童女 明和<sup>三</sup>年八月廿六日

□□童女 □□□□三月□日

過去帳との照合より、五代信興の甥か？。

⑫ □空性添明童女 安永五年五月十日

現段階では、系譜が不明である。

⑬ 貞眞院殿杏林妙操大姉

貞眞院は、五代藩主信興の十三女・享姫である。母は南部（七戸）外

記愛信の娘（恵観院）である。寛政四年（一七九二）五月八日<sup>(85)</sup>、江戸において没している。

⑭ 圓明院殿天眼智照大居士

圓明院は、四代藩主廣信の三男・式部信之である。享保二十年（一七三五）に生まれた。母は廣信の側室・ほの（後の法禪）である。寛政七年（一七九五）四月二十日、八戸において没している。享年六十一才。

二十日には御用掛の諸役が任命され、三日間の鳴物停止が触れられている<sup>(86)</sup>。文化八年（一八一）の十七回忌の法事に際しては、大赦が行われている<sup>(87)</sup>。

⑬ 幻影禪童女 寛政<sup>三</sup>年八月卅日

知光童女 寛政十<sup>戊午</sup>年二月□一日

法園團童女 文政<sup>四</sup>年七月廿九日

「幻影禪童女」は七代藩主信房の姪・「法園團童女」は信房弟・依貞の

三男である

⑭ 月峯禪童女

宗郁禪童女

智鑑禪童女

〈不詳〉

義操了源禪童女

「宗郁禪童女」は、八代藩主信眞の長女・斐姫である。享和二年（一八〇二）八戸で生まれた。母は信眞の継室・琴である。文化四年（一八〇七）八月十三日、八戸において没している。享年六才。

「智鑑禪童女」は、八代藩主信眞の五男・治之進である。文化五年（一八〇八）八戸で生まれた。母は斐姫（宗郁禪童女）と同じく、琴である。

同年六月一日、八戸において没している。享年一才。

「義操了源禪童子」は、八代藩主信眞の六男・亀壽である。文化六年（一八〇九）八戸で生まれた。母は信眞の側室・作である。文化十三年七月十八日、八戸において没している。享年七才。

「月峯禪童子」は、その系譜が不明であったが、過去帳との照合により、五代藩主信興の四男・富之進であることがわかった。

#### ⑩夢覺妙幻禪童女

禮姫は、八代藩主信眞の七女として、文化十年（一八一三）八戸で生まれた。母は信眞の継室・琴である。文政三年（一八二〇）九月十六日、八戸において没している。

#### ⑪清源院殿法岸宗心大居士

清源院は、六代藩主信依の三男・主計である。明和五年（一七六八）江戸で生まれた。母は信依の側室・織瀬（後の量壽院）である。文政四年（一八二二）八月二十三日、八戸において没している。三日間の鳴物停止が触れられている。

#### ⑫賢徳院殿智山仁勇大居士

賢徳院は、八代藩主信眞の七男・眞勝（後の造酒助<sup>みきのすけ</sup>）である。文化八年（一八一二）に生まれた。母は信眞の継室・琴である。文政十一年（一八二八）九月には、造酒助を在所において連枝並に待遇すべしとの命が出されている。天保元年（一八三〇）八月十八日、八太郎崎（現八戸市河原木）において演習中、大砲が暴発し、造酒助は絶命している。この地には、天保四年に信眞が、造酒助の供養のため建立した「大慈大悲開迷霊」の石碑が建てられている。

#### ⑬玉臺露影禪童子

虎之進は、八代藩主信眞の世子・信一の三男である。天保七年（一八三六）に生まれている。母はかねである。翌、八年七月二十四日、八戸において没している。享年一才。

#### ⑭慈雲院殿法月妙瑞大姉

慈雲院は、南部主計（⑩清源院）の室であり、主計との間に秀松（⑮賢自院）を出生している。天保九年（一八三八）十一月二十八日、八戸において没している。<sup>(89)</sup>天保十三年の慈雲院の命日に際し、代香が派遣されている。<sup>(90)</sup>

#### ⑯萩岳慧音禪童女

聖は、九代藩主信順の三女として、弘化三年（一八四六）八戸で生まれた。母は信順の側室・みゑである。嘉永元年（一八四八）八月二十七日、八戸で没している。享年三才。

#### ⑰松壽院殿彈室妙琴大姉

嘉永三<sup>庚戌</sup>年五月初七日

#### ⑱久昌院殿桂月心皓大姉

文久元<sup>辛酉</sup>年八月□二日

<sup>24</sup>は八代信眞の側室、<sup>25</sup>は系譜不明である。

#### ⑲邦安恵公善童子

邦次郎は、九代藩主信順の次男として、万延元年（一八六〇）八戸で生まれた。母は信順の側室・富貴である。翌文久元年（一八六一）八月二十三日、八戸において没している。

#### ⑳賢自院殿仁道子彦大居士

賢自院は、南部主計〔18〕清源院の嗣子・秀松である。母は四の慈雲院である。文化三年（一八〇六）十二月二十七日に、家嗣を継ぎ、祿二百石並（内地形百石・金成百石）・姓を逸見と賜い、家格は番頭座上を命ぜられている。文久元年（一八六一）十月二十六日、八戸において没している。

〔27〕墓碑から戒名・没年月日が読み取れないもの

〔28〕南部董子之墓

董子は、九代藩主信順の四女として、嘉永元年（一八四八）八戸で生まれた。母は信順の側室・みゑである。櫛笥隆義の室となるが、後に離縁。大正十二年（一九二三）三月二十日、八戸において没している。享年七十六才。

以上、家族墓の廓に埋葬された人々の略伝等を見て来た。確認した二十八基の内訳は、藩主生母の墓一基〔1〕・側室墓二基〔6〕・〔24〕、藩主子女墓十六基〔2〕・〔5〕・〔8〕・〔9〕・〔13〕・〔14〕・〔16〕・〔19〕・〔22〕・〔25〕・〔26〕・〔28〕、藩主の甥および姪墓五基〔7〕・〔10〕・〔12〕・〔15〕、藩主子女の室および子の墓二基〔20〕・〔21〕、系譜不明の墓二基〔23〕・〔27〕である。

これらのうち、初代藩主直房の生母〔1〕・次男〔2〕・長女〔3〕墓のみが、五輪塔である。

## 註

〔1〕 八戸市立図書館所蔵「御領内村名・同寺院」、「御領内寺院来由全」

〔2〕 八戸市立図書館所蔵「八戸藩日記」寛文十一年五月～八月の条に

は、南宗寺普請の記事が散見する。

〔3〕 前田利見編『八戸藩史料』伊吉書院 一九二九 一六頁。

〔4〕 「南宗寺文書」

当院領百石之事、九戸郡輕米寄附之「宇全可被寺納之状如件、

寛文六年十二月十八日 直房（花押） 愚首座へ

〔5〕 八戸市立図書館所蔵「御領内寺院来由全」

なお、当資料には「…此境内者舊有今之玄中寺之隣地然風水不利故寛文七年「春移此境以為菩提所」とあり、当初は玄中寺の隣地にあったが、風水不利の故、寛文七年の春に移転したことを記している。ここでは、〔2〕・〔3〕に従い論を進める。

〔6〕 山田英二『心から心への旅路―江戸三十三観音めぐり』大蔵出版 一九七九

〔7〕 村上直・木村礎・藤野保編『藩史大事典 第一巻 北海道・東北編』雄山閣 一九八八

〔8〕 横山信八「院内御廟記事」（『會津史談會報』第十三號所収、會津史談會 一九三六）、會津史談會「會津松平家廟所と其系譜」（『史蹟研究部会会報』第六号所収、會津史談會、一九六一）、星野善三郎「院内御廟の記」（『好故』第二号所収、會津武家屋敷、一九八四）

〔9〕 仙台市教育委員会『仙台市文化財調査報告書第二十二集 経ヶ峰』一九八〇

〔10〕 弘前市立博物館『昭和五十八年度墓確認調査報告書 弘前の墓』一九八四

〔11〕 伊東信雄編『瑞鳳殿 伊達政宗とその遺品』瑞鳳殿再建期成会

一九七九

- (12) 伊東信雄編『感仙殿 伊達忠宗、善応殿 伊達綱宗の墓とその遺品』一九八五

- (13) 矢島恭介「徳川霊廟の調査―六代將軍家宣墓の調査」(『考古學雜誌』第四十四卷第四号所収、日本考古學會、一九五九)、鈴木尚・矢島恭介・山辺知行編『増上寺 徳川將軍墓とその遺品・遺体』東京大学出版会 一九六七、鈴木尚「骨は語る徳川將軍・大名家の人びと」東京大学出版会、一九八七

- (14) 鎌木義昌・水内昌康・間壁忠彦・間壁葎子「第二編 池田忠雄墓所の考古学的調査」(『池田忠雄墓所調査報告書』抜刷所収、一九六四)

- (15) 東京都港区教育委員会『港区三田済海寺 長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』一九八六

- (16) 井上光貞監修『図説歴史散歩事典』山川出版社 一九八三 一二〇頁。

- (17) 現在、国立歴史民俗博物館所蔵となっている「江戸図屏風」(重要文化財)には、將軍の「御宮御社参」が描かれている。この行事は正月、三月、四月、五月、六月、九月、十二月の各十七日初代家康の命日に、前夜から齋戒沐浴した將軍が、直垂に烏帽子という正装で、輿に乗って参詣するという(村井益男『江戸城』中央公論社 一九八七 一三〇・一三一頁)

- (18) 田邊 泰『徳川家霊廟』彰國社 一九四二

- (19) 前掲(13)のうち『増上寺 徳川將軍墓とその遺品・遺体』

- (20) 前掲(18)、村上博了『増上寺史』大本山増上寺 一九七四、浦井正明『もうひとつの徳川物語―將軍家霊廟の謎』誠文堂新光社、一九八七

- (21) 文化庁監修『重要文化財総索引―建造物編』毎日新聞社、一九七五

- (22) 前掲(13)

- (23) 濱田直嗣「東北の霊廟」(『白い国の詩 歴史編』所収、一九七八、東北電力)

- (24) 前掲(11)

- (25) 東奥日報社『写真集 青森県の文化財』一九八八

- (26) 片山寛明「調査編 高照神社の絵馬と信仰」(『津軽藩の絵馬』所収、一九八三、根岸競馬記念公苑)

昨年、岩木町教育委員会から『岩木の絵馬』(一九八九)が刊行され、その中にも高照神社に奉納された絵馬が収録されている。

- (27) 『地域総合展「岩木山」展示解説書 岩木山』第四章「津軽藩と岩木山」(一九八九、青森県立郷土館)

- (28) 前掲(15)

- (29) 前掲(15)

- (30) 前掲(14)

- (31) 前掲(11)

- (32) 前掲(12)

- (33) 明治初年「元八戸南部家譜系」(『寛政重修諸家譜第二編』)以下、藩主の略伝については特に断らない限り、この資料による。

筆者が加筆した点は\*―\*で示した。

- (34) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世1』一九六九 一五六頁。

原本は八戸市立図書館所蔵。

- (35) 前掲(3) 一六九頁。

- (36) 前掲(34) 二二九頁。

- (37) 筆者「東善寺から豊山寺へ」祈禱寺の歴史を探索」(『研究紀要第  
四巻』所収 一九八八 八戸市博物館)

- (38) 前掲(34) 二五二頁。

- (39) 前掲(34) 二四〇頁。

- (40) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世2』一九七〇  
六〇頁。

- (41) この江戸屋敷は、元禄二年(一六八九)二月五日に拝領したもの  
であり、明治初年まで八戸藩の江戸上屋敷であった。二代藩主直政  
が御側衆を辞した後、拝領したことになる。跡地は「林野庁六本木  
宿舍跡地内遺跡」として、最近、港区教育委員会の手によって発掘  
調査が実施されている。その本報告が待たれるところである。

- (42) 前掲(3) 一六三・一六四頁。

- (43) 前掲(34) 二一八―二三八頁。

- (44) 前掲(3) 二九・三〇頁。

- (45) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世3』一九七二  
四五七頁。

- (46) 前掲(45) 四八九・四九九・五〇一頁。

- (47) 前掲(33) では、「享保元年八月二十七日」としているが、「八戸  
藩日記」の記述および墓碑名より「享保元年八月二十四日」と訂正  
する。

- (48) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世4』一九七四  
三八頁。

- (49) 前掲(3) 二七六頁。

- (50) 前掲(33) では、「享保八年」としているが、「八戸藩日記」より  
「享保十年」と訂正する。

- (51) 前掲(33) では、「年五十一」とあるが、「年四十九」の誤りであ  
る。

- (52) 前掲(3) 四九六・五二三・五二五・五八三頁。墓碑は「十月  
十二日」没。

- (53) 八戸市立図書館所蔵 八戸南部家文書 弘化三年「系譜」

本資料は弘化三年(一八四六)九月、八戸藩九代藩主・南部信順  
が公儀に提出した八戸南部家の系譜である。

- (54) 前掲(3) 五九四頁。

- (55) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世9』一九八一  
一七四・一七五頁。

- (56) 前掲(20) のうち『もうひとつの徳川物語―將軍家靈廟の謎』二  
四五―二四七頁。

- (57) 前掲(55) 三三二頁。

- (58) 前掲(3) 六〇二頁では「十二月七日」とするが、墓碑では「十  
一月十三日」没。



(59) 前掲 (33) 本資料は、八代藩主信真が寛政九年四月十八日に参勤のため、將軍家へいとま乞いをするまでを記している。

(60) 前掲 (53)

(61) 前掲 (55) 四一五頁。

(62) 前掲 (3) 六一三頁。

信順が五男とするのには異説があり、十三男であるとの説もある。

江刺家均氏の御教示によれば、家嗣相統の順位により五男として公儀へ届け出したものと考えられるという。ここでは、従来の説に従う。

(63) 前掲 (3) 六二五頁。

(64) 八戸市立図書館所蔵 南部家旧蔵本「元八戸南部家系」

以下、明治以降の旧藩主の略伝については特に断らない限り、この資料による。筆者が加筆した点は\*—\*で示した。

(65) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世10』一九八二  
二二九頁。

(66) 青森県『青森県史』第五卷(一九二六)三二六頁。

(67) 前掲 (3) 六二五頁。

(68) 前掲 (65) 四五八頁。

(69) 前掲 (65) 四六三頁。

(70) 前掲 (3) 七四七頁。

「大士 給禄四十俵(三斗五升入)、中士 同三十俵、小士 同二十俵」とみえる。

この三階級制導入について、明治二年十月十六日付の「御用人所

日記」では以下のように記している。

一、上中下士之儀者、朝典之通是迄給禄之多少寄百五拾石以上を大士と御定、五拾石以上を中士と御定、其以下ハ少士と御定之事、

右之通被仰出候間、此旨相心得可被申候、

前掲 (65) 四五八頁。

(71) 前掲 (3) 七四七頁。

田中秀和氏によれば、弘前藩の場合は明治三年閏十月の寺社の禄制改革によつて、寺社領(地方知行)は引き上げられ、五十石以上の寺院については従来の知行高折半の上一石一俵の割で奉禄を支給し、それ以外にも削減率は低いが奉禄制に移行した、という(『近代神社制度の成立過程—津軽地方の神仏分離と神社改正—』長谷川成一編『北奥地域史の研究—北からの視点—』名著出版 一九八八所収)。

(72) 前掲 (65) 五二九頁。

(73) 前掲 (65) 五六三・五六四頁。

(74) 前掲 (65) 五六四頁。

(75) 弘前藩の場合については、田中秀和氏の詳細な研究報告がある(『寺社領の変遷と神仏分離政策の動向—弘前藩を事例に—』『弘前大学国史研究』第79号 一九八五所収) および前掲 (71)。

本稿では、紙数の関係もありここでは詳しくは触れない。別稿で、八戸藩を事例とした神仏分離政策の動向についてまとめてみたい。

(76) 前掲 (65) 五六五・五六六頁。

(77) 前掲(3) 七六四～七六六頁。

(78) 「八戸市」(『日本歴史地名大系第二巻 青森県の地名』 平凡社 一九八二 所収)。

(79) 前掲(3)

以下、埋葬者の略伝は特に断らない限り、この資料による。

(80) 前掲(34) 二四五～二四八頁。

(81) 前掲(48) 一〇三頁。

(82) 前掲(48) 四六五頁。

(83) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世5』 一九七七 一四五頁。

(84) 前掲(16) 二八六頁。

(85) 前掲(3) 四七九頁では、没日を「五月九日」としているが、「八戸藩日記」天保十三年五月八日条に「貞真院様御祥忌ニ付御代香」と見える。また、南宗寺に建立されている墓碑名も「五月初八日」とあることから、ここでは「五月八日」とする。

(86) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世7』 一九七九 三九二頁。

(87) 八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世8』 一九八〇 二二二頁。

(88) 前掲(3) 五二八頁では、没日を「九月十七日」としているが、墓碑名から「九月十六日」とする。

(89) 八戸市立図書館所蔵「御霊神御年数書上」 一八七五

本書は、藩主・正室・成人子女の名前・没年・明治八年までの年

数を書き上げている。八戸藩では、明治四年に神葬祭に改めていることから、本書には戒名は記されていない。

(90) 前掲(55) 三三五頁。

(八戸市博物館学芸員)

[表1] 江戸時代大名の霊屋

No.	廟 名	建 造 年 代	所 在 地	指 定	備 考
1	津軽為信霊屋	慶長13～19年	青森県弘前市 革秀寺	重要文化財	土間式
2	津軽為信室霊屋	寛永5年建立、寛文12年再建	青森県弘前市 長勝寺	重要文化財	土間式
3	津軽信枚霊屋	寛永8年			
4	津軽信枚室霊屋	寛永15年			
5	津軽信義霊屋	明暦2年			
6	津軽信著霊屋	宝暦3年			
7	南部利康霊屋	寛永8～9年	青森県南部町 三光寺	重要文化財 県 重 宝	床板敷
8	南部利直霊屋	寛永9年頃			
9	伊達光宗廟	三 慧 殿 正保4年5月	宮城県松島町 円通院 陽徳院	県 重 文	床板敷
10	伊達政宗室廟	三 宝 華 殿 万治3年5月			
11	伊達成実廟	正保頃	宮城県亘理町 大雄寺	県 重 文	床板敷
12	伊達実氏廟	享保頃			
13	伊達実元廟	天保7年4月			
14	伊達光倫廟	高 台 院 寛文12年7月上棟	宮城県登米町 寛乗寺	県 重 文	床板敷
15	伊達宗重廟	見 龍 院 寛文13年9月	宮城県涌谷町 見龍寺	県 重 文	土間式
16	伊達宗重廟	長 厳 院 元禄頃			
17	伊達宗元廟	本 源 院 正徳3年			
18	伊達宗元室廟	宝 台 院			
19	伊達村元廟	玄 珠 院 享保4年			
20	茂庭良元・定元・姓元廟	宝永頃	宮城県松山町 石雲寺	県 重 文	床板敷
21	上杉謙信廟	明治9年	山形県米沢市 御廟	国指定史跡	土間式
22	上杉景勝廟	慶長10年			
23	上杉定勝廟	正保			
24	上杉綱勝廟	寛文			
25	上杉綱憲廟	元禄			
26	上杉吉憲廟	享保			
27	上杉宗憲廟	享保			
28	上杉宗房廟	延享			
29	上杉重定廟	明和			
30	上杉治憲廟	天明			
31	上杉治広廟	文化			
32	上杉斉定廟				
33	上杉顕孝廟				
34	戸沢正誠墓所	7号棟御霊屋	山形県新庄市 太田瑞雲院	国指定史跡	土間式
35	戸沢政盛他墓所	1号棟御霊屋			
36	戸沢正庸他墓所	2号棟御霊屋			
37	戸沢正勝他墓所	3号棟御霊屋			
38	戸沢正産・正令墓所	4号棟御霊屋			
39	戸沢正良他墓所	5号棟御霊屋			
40	戸沢正胤他墓所	6号棟御霊屋			
41	佐竹家霊屋	寛文12年	秋田県秋田市 天徳寺	重要文化財	畳 敷
42	丹羽長重廟	天保7年	福島県白河市 円明寺		
43	相馬義胤廟		福島県小高町 同慶寺		床板敷

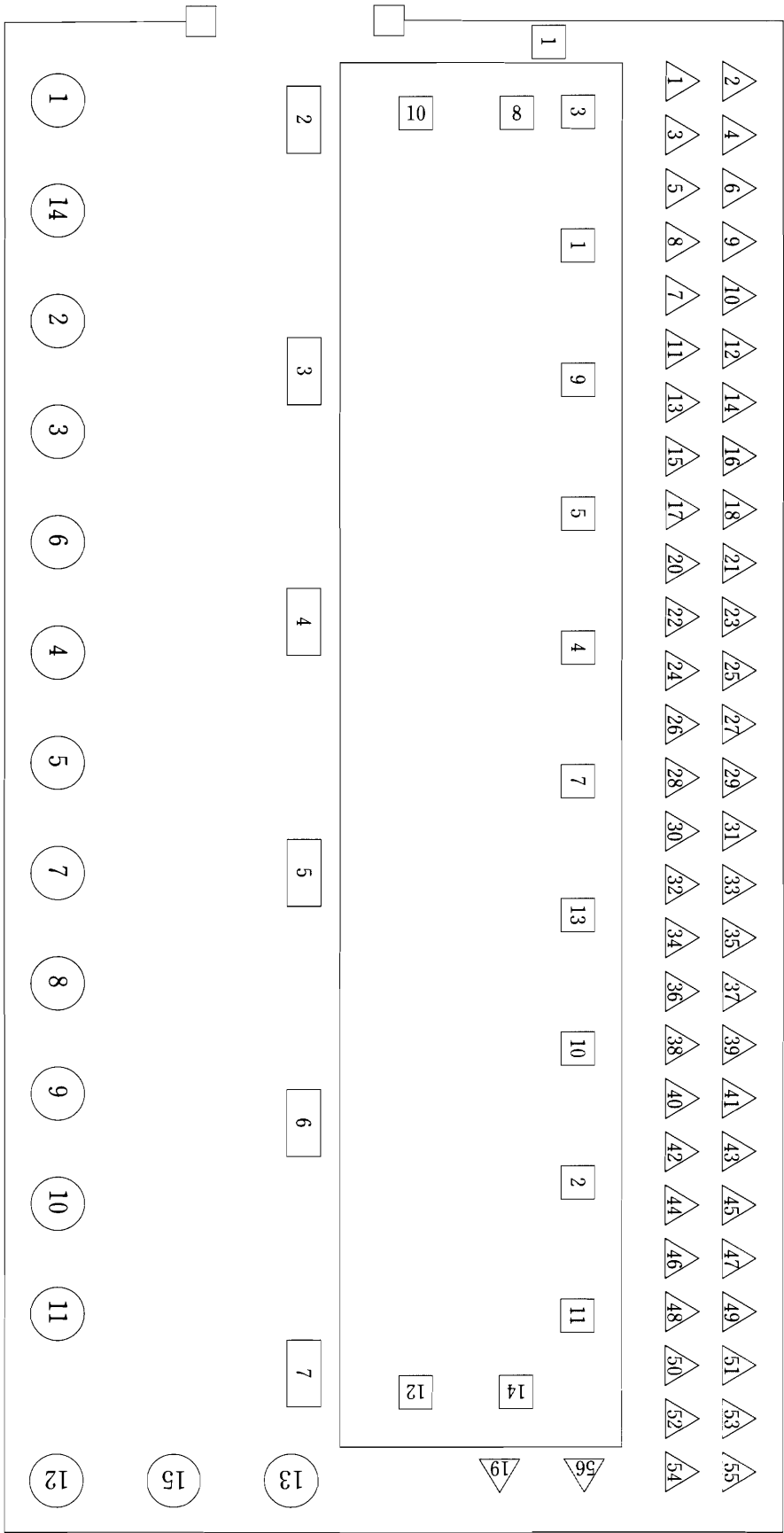
[表2] 江戸時代大名家の霊屋

No.	廟 名	建 造 年 代	所 在 地	指 定	備 考
44	真田信重霊屋	慶安2年	長野県松代町 西楽寺	重要文化財	床板敷
45	真田信之霊屋	万治3年	長野県松代町 長国寺	重要文化財	床板敷
46	真田信弘霊屋			県 指 定	
47	源 敬 公 廟	承応元年	愛知県瀬戸市 定光寺	重要文化財	
48	徳川家霊廟	天明7年再建	愛知県名古屋市 建中寺	県 指 定	
49	松平秀康母霊屋	慶長9年	和歌山県高野町 蓮花院	重要文化財	石 敷
50	松平秀康霊屋	慶長12年			
51	上杉謙信霊屋		和歌山県高野町 清浄心院	重要文化財	
52	佐竹義重霊屋	慶長4年10月15日(逆修)			石 敷
53	細川忠利廟		熊本県熊本市 妙解寺跡	県 指 定	
54	細川忠利室廟				
55	細川光尚廟				
56	細川藤孝廟		熊本県熊本市 泰勝寺	県 指 定	
57	細川藤孝室廟	光 寿 院			
58	細川忠興廟				
59	細川忠興室廟	秀 林 院			

[参考・引用文献]

- ・高島成侑「建造物」(『写真集 青森県の文化財』所収、東奥日報社、1988)
- ・青森県教育委員会 『青森県の国・県指定文化財』1983
- ・宮城県教育委員会 『宮城県文化財調査報告書第98集・宮城県の近世社寺建築』1983
- ・涌谷町教育委員会 『宮城県指定重要文化財 見龍院霊屋修復工事報告書』1986
- ・松山町教育委員会 『松山町の文化財第1集』1986
- ・日本建築学会 『総覧 日本の建築第1巻 北海道・東北』1986  
『総覧 日本の建築第5巻 東海』1987  
『総覧 日本の建築第9巻 九州・沖縄』1988
- ・文化庁文化財保護部 「新指定の文化財」(『月刊文化財』243号所収、第一法規出版、1983)  
「新指定の文化財」(『月刊文化財』272号所収、第一法規出版、1986)  
「新指定の文化財」(『月刊文化財』291号所収、第一法規出版、1987)  
「新指定の文化財」(『月刊文化財』319号所収、第一法規出版、1990)
- ・文化庁監修 『重要文化財14 建造物III』1974、毎日新聞社  
『重要文化財総索引・建造物編』1975、毎日新聞社
- ・福島県高等学校社会科研究会 『福島県の歴史散歩』1977、山川出版社

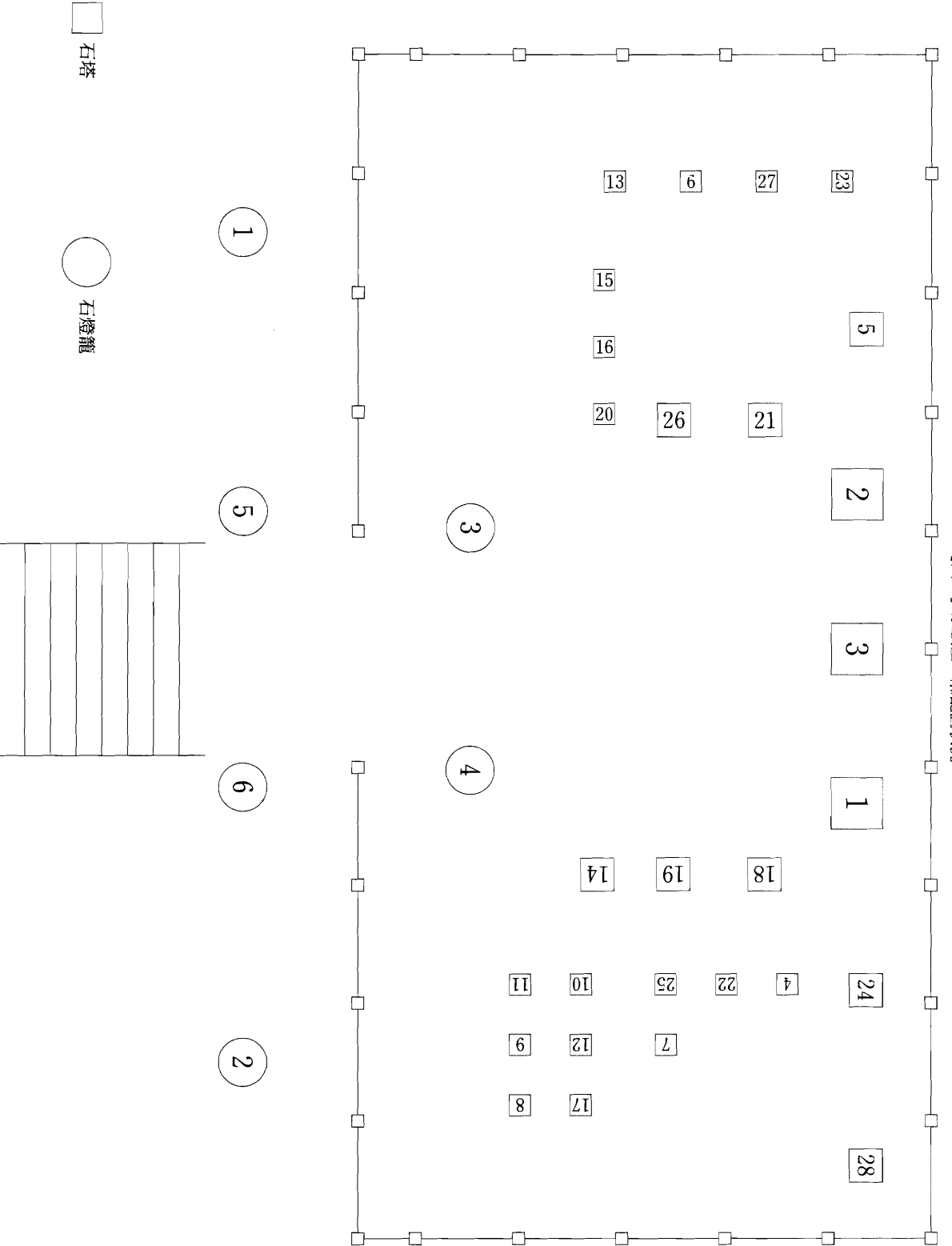
【図1】 藩主の席配置状況



[表3] 埋葬者埋葬年月日一覧

墓No.	墓形式	代	名前	戒名	生没年月日
1	五輪塔	初代	直房	清涼院殿前金吾次將天性自心大居士	寛永5年(1628) ~寛文8年(1668) 6月24日
2	五輪塔	2代	直政	天祥院殿前遠州大守月禪宗真大居士	寛文元年(1661) 5月6日～元禄12年(1699) 2月16日
3	五輪塔	初代母	川口源之丞の娘	靈松院殿法靈宗球大姉	? ~正徳3年(1713) 5月20日
4	五輪塔	3代	通信	三玄院殿前遠州大守法林徹証大居士	延宝元年(1673) 2月11日～享保元年(1716) 8月24日
5	五輪塔	4代	廣信	正見院殿前甲州大守寛雲宗知大居士	宝永3年(1706) 3月7日～寛保元年(1741) 5月2日
6	五輪塔	5代	信興	龍津院殿前左金吾秋尉珠藏宗源大居士	享保10年(1725) 9月25日～安永2年(1773) 8月13日
7	五輪塔	6代	信依	宝性院殿前甲州大守樺岩宗安大居士	延享4年(1747) 2月11日～天明元年(1781) 6月7日
8	五輪塔	8代長男	信經	簾成院殿韶嚴宗儀大居士	寛政10年(1798) 2月6日～天保4年(1833) 10月16日
9	五輪塔	7代	信房	仙溪院殿前勢州大守仁道宗壽大居士	明和2年(1765) 6月15日～天保6年(1835) 5月12日
10	五輪塔	8代次男	信一	梅林院殿檀岸宗海大居士	寛政11年(1799) 9月29日～天保8年(1837) 12月13日
11	五輪塔	8代	信真	惇徳院殿前左金吾秋尉仁峰宗榮大居士	安永7年(1778) 2月1日～弘化3年(1846) 12月29日
12	五輪塔	9代正室	8代信真の8女、鶴姫	常行院殿寂室妙照大姉	天保7年(1836) 9月13日～元治元年(1864) 12月23日
13	角柱	9代	信順	神葬祭のため戒名なし	文化10年(1813) 1月11日～明治5年(1872) 2月20日
14	角柱	11代	麻子		? ~大正2年(1913) 12月22日

〔図2〕 家族墓の彫配置状況



〔表4〕埋葬者・埋葬年月日一覧

墓No.	墓形式	代	名前	戒名	生没年月日
1	五輪塔	初代生母	中里嘉兵衛正吉の娘	仙壽院殿松嶺妙閑尼大姉	？ ～延宝元年(1673) 10月25日
2	五輪塔	初代次男	直常	天岸院殿江嶽宗靈大居士	？ ～延宝8年(1680) 6月22日
3	五輪塔	初代長女	富	操松院殿貞室宗清大姉	寛文9年(1669) 3月5日～享保3年(1718) 8月8日
4	自然石	4代長女	圓	瑚林妙珊童女	享保9年(1724) 6月27日～享保10年(1725) 6月1日
5	自然石	4代次男	熊次郎	蘭庭慧秀童女	享保15年(1730) 11月18日～享保16年(1731) 9月16日
6	笠付角柱	4代側室	窪田平右衛門の娘・みせ	慈照院殿月空清心大姉	？ ～寛延3年(1750) 12月10日
7	地藏菩薩	5代姪	於佐那	幻體了有禪童女	？ ～宝暦2年(1752) 6月5日
8-1 8-2	角柱	5代次女 6代女	徳子 源子	是心天空禪童女 狐雲了影禪童女	宝暦4年(1754) 5月22日～宝暦4年(1754) 5月23日 ？ ～宝暦8年(1758) 8月18日
9	角柱	5代女	逸子	如幻了夢童女	？ ～宝暦8年(1758) 5月18日
10-1 10-2 10-3	角柱	5代甥 5代甥 ？	友千代 徳松 ？	圓谷童子 狐圍禪童子 □□童子	？ ～宝暦10年(1760) 3月11日 ？ ～明和3年(1766) 8月26日 ？ ～？ 3月□日
11	角柱	5代甥	政之進	性空禪童子	？ ～安永2年(1773) 6月21日
12	角柱	5代姪	？	□空性明童女	？ ～安永5年(1776) 5月10日
13	舟形	5代13代	亨	貞眞院殿杰林妙操大姉	？ ～寛政4年(1792) 5月8日
14	舟形	4代3男	式部信之	圓明院殿天眼智照大居士	享保20年(1735) 9月16日～寛政7年(1795) 4月20日
15-1 15-2 15-3	角柱	7代姪 ？ 7代甥	？ ？ 依貞3男	幻影禪童女 知光童女 法圓剛童子	？ ～寛政2年(1790) 8月20日 ？ ～寛政10年(1798) 2月1日 ？ ～文和2年(1805) 7月29日
16-1 16-2 16-3 16-4	角柱	8代4男 8代長女 8代5男 8代6男	富之進 斐 治之進 龜壽	月峯禪童子 宗郁禪童女 智盛禪童子 義操了源禪童子	？ ～寛和元年(1801) 8月3日 享和2年(1802) 3月25日～文化4年(1807) 8月13日 文化5年(1808) 3月23日～文化5年(1808) 6月1日 文化6年(1809) 10月2日～文化13年(1816) 7月18日
17	角柱	8代7女	禮姫	夢覺妙幻禪童女	文化10年(1813) 6月27日～文政3年(1820) 9月16日



[表5] 埋葬者・埋葬年月日一覧

墓No	墓形式	代	名前	戒名	生没年月日
18	舟形	6代3男	主計	清源院殿法岸宗心大居士	明和5年(1768)11月8日～文政4年(1821)8月23日
19	舟形	8代7男	眞勝。後、造酒助	賢徳院殿智山仁勇大居士	文化8年(1811)12月10日～天保元年(1830)8月18日
20	角柱	8代世子3男	虎之進	玉臺露影禪童子	天保7年(1836)10月11日～天保8年(1837)7月24日
21	舟形	No18-正室	於岩	慈雲院殿法月妙瑞大師	？ ～天保9年(1838)11月28日
22	角柱	9代3女	聖	萩岳慧音禪童女	弘化3年(1846)4月10日～嘉永元年(1848)8月27日
23	舟形	？	？	松壽院殿彈室妙琴大師	？ ～嘉永3年(1850)5月7日
24	舟形	8代側室	？	久昌院殿桂月心皓大師	？ ～文久元年(1861)8月2日
25	角柱	9代次男	邦次郎	邦安恵公善童子	万延元年(1860)3月19日～文久元年(1861)8月23日
26	舟形	No17-長男	秀松	賢自院殿仁道子彦大居士	？ ～文久元年(1861)10月26日
27	舟形	？	？	？	？
28	角柱	9代4女	童子	神葬祭のため戒名なし	嘉永元年(1848)8月15日～大正12年(1923)3月20日